

そうしん しこくやま
双身 四国山

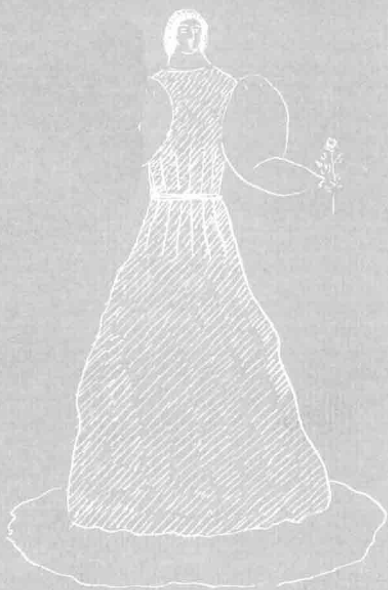
梅原稜子



新潮社版

双身 四国山

梅原稜子



新潮社版

双身四国山

昭和五十九年五月十日印刷
昭和五十九年五月十五日発行

定価一三〇〇円

著者 梅原稜子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 〇三一二六六一五一一(業務)
〇三一二六六一五四一一(編集)

印刷所 株式会社金羊社

製本所 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが
小社通信係宛御送付下さい。

送料小社負担にて
お取替えいたします。

©RYŌKO UMEHARA 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-352601-7 C0093

双身四国山*目次

双身…………… 9

柿もぎ童女…………… 59

橋の景色…………… 105

海の巣…………… 155

四国山…………… 211

双身
四国山

裝圖 有利夫

双身

そうしん

遠縁の娘が郡山市の青年と結婚することになって、十月上旬の式の日には私はその町へ行った。東京で勤めていた娘で、彼女の郷里も四国にある。四国からでは出席できる親類の者が少なく、さして深いつきあひもない私も加わつたのだつた。

町のあちこちで百日紅さるすべりの花が目につく、晴れ渡つた日だつた。披露宴が終わつて、その晩、親戚の者たちと市内の旅館に泊まつた。そこで二次会のようなかたちになり、皆は遅くまでひと部屋に集まつていた。はつきりとは口にしないが皆の心配の種はやはり、彼女が知己もない土地で、商売をしている夫の実家の中に入ってやつていくことであつた。誰ともなしに、こうなればかえつて覚悟を決めてやつていくものだろうと言ひ、また、やつていきそうな彼女の氣質を口にした。

「なに、遠くからきた嫁は可愛いつていうから、心配いらんで。千キロ以上も離れてるんや」
酔いで頸すじを赤くした花嫁の伯父がそう言つたりした。

その日は祭日と日曜とが重なり、翌日は振替え休日だつた。ひと足先に郡山へ来ていた花嫁の両親も含めて、何人かは翌日に一晚泊まりで那須へ遊びに行く予定になつてゐる。さして親しくない私はそちらの方は遠慮した。折角だからどこかを見物して帰ろうか、と引きあげた部屋で時刻表の地図を開いて眺めるうちに、足利市に目が停まつた。足利へは浅草から私鉄電車で行くも

のとばかり思っていたので、朝方、小山駅を通過した時にも気がつかなかつたのだが、東北本線の小山で乗り換えれば案外近い。

足利には、大学時代からの友人の尾阪慧子けいこがいる。慧子は卒業後も東京で暮らしていたが、おとどしの夏に故郷の桐生に帰って行った。そして、いまは足利に移り住んで、入籍はしていない新世帯をもっている。

——足利のはずれに家を借りて、すっかり世間を狭くして暮らしております。

手紙にはそういう一節もあった。それだけに、いつか訪ねてみようと思っていた。秋の連休の日ともなると遠出でもしているだろうか。しかし連休の二日めだから夕方には戻ってくるだろう。前もって連絡して、ゆつくりと泊まりがけでも訪ねたいところだが、こういう時でもないとなかなか行けないものだ。私は、慧子のことを考えているうちに堪らなく会いたくなつた。

叔母たちが着物を畳んでいる脇で手帳の住所録を繰って、ちよつと落胆した。その新居に電話がないことは承知していたけれども、住所も記していないのだった。しかし着いてから調べる方法はあった。何とかなるだろう。私は足利へ行くことにした。

翌日も秋晴れの空だった。東京へまっすぐ戻る人たちはひと足遅れて帰ることになり、私は那須行きの一行と急行列車に乗った。

秋の朝の陽ざしを浴びて彼方の連山も屋並みもくつきりと近づいて感じられ、田圃沿いの道を自転車が濃い影を曳いて、後ずさるかのように進んで行った。

「今月いっぱい勤めを辞めようと思うの。故郷へ帰ることにしたのよ」

慧子からそう電話があったのは、おとどしの八月下旬のある晩だった。ひと月ほど前にも会っ

ており、その時にはひとことも洩らしていなかったもので、電話口で私は驚いた。事務的な、どこか構えた口ぶりで慧子は言い、「縁談？」などとは訊けない感じた。

帰るまでに一度外で食事でもしたい、いついつはどうかと彼女は訊くのだが、私はそれまで待てなかった。その日も休日の、確か八時を過ぎた頃だった。いまからそちらへ行っても構わないかと言うと、慧子はためらいがちに承諾した。私は着替えて部屋を出、タクシーで彼女のアパートに向かった。かつて慧子はごく短かな結婚生活を送っている。離婚した時にもかなり経ってから聞いたのだが、しかしそれは当然だろう。けれども仕事を辞めるとか帰郷とかとなればこちらも少しは聞き手になれただろうし、第一、先月会った時にその素ぶりも見せないはずいふんと友達甲斐のない人だ——。その不満をぶつけたい気持でもあった。

私は、上京して初めての下宿で慧子と知合った。二校の女子学生が入っている下宿で、慧子とは大学も学年も同じであった。独身の中年の女性が下宿を賄っており、食事は給食のように揃って食堂で摂った。下宿生たちは小母さんを囲んで雑談したり、銭湯を誘い合わせたりしたが、慧子は朗らかだけれども女学生ふうな団欒はあまり好まないふうだった。食事が終わればほどよく部屋へ引上げており、小母さんにも用件を話す程度である。綺麗好きで、朝の洗面台に現われる時もすでに髪を整えている。日曜の朝、皆が起きる頃には、玄関先に腰掛けてハミングしながら靴を磨いており、見ると彼女の部屋の窓辺にはもう洗濯物が干してあった。

学部も同じだったので、そのうちに慧子と親しくなった。部屋に行くと、本が多く、それは友人の下宿でも見慣れていてあまり驚かないが、こちらがようやく読み始めたような本の背が、中学生、高校生の時に読んだという通り、黄ばんでいるのだった。当初の取りつきにくそうな印象とは違って、育ちのよさそのままに率直な、少々男っぽい、気性のはっきりした人だった。私の

方が先にそこを引払ったのだが、もとの下宿へたびたび電話を掛けるのも憚られ、慧子に会いたい時はサークルの部室へ行って呼出した。

卒業後、慧子はある業界連合会の事務局に就職した。彼女の結婚生活は一年あまりのものだった。卒業してからも時々会い、ことに慧子が離婚してからは勤め帰りなどによく落合った。何でも話すというわけではないが、同じ下宿にいた者同士の気易さは、少なくとも私の方では変わっていないつもりだった。

「この通りなのよ。急に決まったもので毎日、てんてこ舞いしてるの」

部屋に行くとき慧子は、いそいそと迎えた。顔にも動作にも張りがあった。

まだ組立てていない新しい段ボールの束が踏込み口を占め、トランクが押入れから出され、本棚のいくつかが空になって残りのひとつに本が横積みにされている。古本屋に来てもらって処分したのだという。どの棚も、本で隠れていた部分とそうでない部分との木の色が違っており、一瞬、歯のすっきり抜けた若い人の顔を連想した。

「決めるとすっきりしたわ。リュックでもしよって立上った時みたいな気分なのよ」

と言って慧子は、窓もカーテンも開け放った部屋に坐って話し始めた。道を行く人の話し声か二階の窓辺までそっくり届く、風の熄んだ、蒸暑い晩だった。これといった当てがあつて帰るのではない、しかし自分は今もともと郷里で暮らすのが性に合っているようだ、離婚した時も帰ることを考えたのだが、やはり世間の目の煩わしさを思つてそうはできなかつた、桐生では勤めないで、自分、実家でぶらぶらしているつもりだ。そう言う。

「決めたら、ぐずぐずしない人だから」

「いずれ、女は気楽ね、時期が来て退職して、ついでに居場所も変えたと思つて頂戴。……ここ

と協会とを毎日往復して、協会で作っていることといえばあれでしょう。いまの生活、もうここまでできちゃったの」

喉許で手を浮かせて、そうも言う。勤務先では事務の仕事をやっており、その仕事に打込めな
いことや、年齢が高くなるにつれて居づらい思いをすることは、普段も洩らしてはいた。広告会
社に勤務して制作の仕事に携わってきた私には、ことに年齢の話の方は想像はついても実感の薄
い事柄だった。そのせいもあってか、慧子も他人ごとのように時折触れる程度だった。

気持がすでに故郷へ飛んでいることや大きな区切りのついた感じを慧子は言うのだが、その割
には黙りがちになり、声にも無理に弾んでみせているところがあった。

十一年間暮らした東京を離れるのだからさまざまの思いがあるだろうが、それを言おうとしな
い慧子に私は、この人は何かを決めたのだ、と思った。慧子のことだから、悪くはしないはずだ。
怠惰にやり過ごしたり、次に会った時に愚痴や不服がふえることになったりはしないはずだ、と
妙に頷けるものがあった。

引越しは親戚の学生が手伝いに来てくれるという。引越しの段取りを聞きながら私は改めて室
内を見廻した。その部屋には不似合いな、どっしりした箆筒や鏡台が並んでいて、初めて訪れた
時に私はそれらの荷物に離婚の厄介さを実感したものが、実家の一室にこれらが収まった具合
はどうだろう。肩身の狭さというようなことは我慢できない人なのだ。

大学一年の秋、私は週末帰省をする慧子といっしょに桐生の実家に行き、ひと晩泊まってきた
ことがある。冠木門の上に枝ぶりのいい檜が掛かった、古い家だった。慧子は高校生の時に母親
を亡くしている。見るからに謹厳な、頼り甲斐のありそうな父上と、年の離れた兄と、母親代り
になって家事をやっている姉とがいた。兄はいやに調子よく慧子をからかい、下宿で接するのと

は違つて彼女も他愛のない末娘になった。姉は二十二、三歳だったが、地味で古風な感じの人で、もつと年上に見えた。夜更けに私が洗面所の電気のスイッチを探していると、浴衣の寝間着に伊達巻姿の姉が教えに来た。若いのにこんな窮屈な恰好で寝るのかとその後姿を眺めたものだが、家の中を取り仕切り、翌日には焼いたケーキを持たせて「鳩の会の小母さんによろしくね」と言つた。慧子がつけた下宿の主人の渾名だとわかり、すると下宿人たちのことは「鳩の会の皆さん」とでも言つているのだろうか、なるほどうまい命名だ、と思つたものだ。

その後、兄も姉も結婚し、父親は慧子が結婚する一年ほど前に亡くなつた。現在、実家にいるのは兄の一家である。慧子は兄嫁に当たる人のことは立てる言い方で話してゐた。こちらが言わない限り訊かない人だから離婚の時には助かつた、とも言つてゐた。両親の法事の相談なども嫁いだ姉へより慧子の方へ先に声をかけてくる。離婚のあとで親類の老人が姓名判断をしてもらい、しきりに改名を勧めたところ、兄嫁がまづ先に反対したともいう。だが、そういう人であっても、親子水入らずで暮らしてゐたところへ年のあまり違わない義妹に加わられるとなると、これまでのようなわけにはいくまい。

兄嫁のことは充分考えたであらうとは思つたが、私は余計なことを言つた。

「これが、お父さまがお元氣な頃ならばまた違つたでしょうけれど。それに、あなたが桐生でアパート暮らしでもするのなら、別だけでもね」

「本来ならあの家は帰る所ではないわよね、一度結婚したのですものね。でもきつぱりそう考えることもできなくて、わたしは甘いのかしら。……父が生きていたらかえつて、こんないい加減なところは見せられなかつたと思うわ」

どちらから言い出したのか、その晩、私は段ボールを組立てるのを手伝つた。組立てた函を部